

Title	クリュチュフスキ教授の著書から
Sub Title	
Author	堀, 竹雄(Hori, Takeo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1927
Jtitle	史学 Vol.6, No.2 (1927. 5) ,p.109(261)- 131(283)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19270500-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

クリュチエフスキ教授の著書から

起り来るすべての困難な問題を處理するに當つて、他國の知識方法は残りなく採用するが、毫も他國人の手を借りず、いかに優秀な文化を持ち、物質的に優勢な相手に出會つても、自己の面目を傷つけずには、適當な處置をつけ、絶えず生存を脅かす外界の人爲と、天然との迫害に屈せず、貧弱なる物資と統御し易からざる人間とを使つて、宇内に類例なき歴史を作り、よく自己の環境を諒解して將來の計畫を爲しつゝある吾人の眼で以て、國初以來嘗て自力で自己の難境を切り抜けた事がなく、無限の富を藏すると自負してゐる土地に居住して居りながら、此物資を利用して幸福なる生活を營むことが出來ず、多趣多様なる住民を包擁して居りながら、此民族の特性を發揮させて、安定せる共同生存の基を固むることが遂げられず、少し手硬はき難問題に出つくはすと、意氣沮喪、廣大なる地域を其處此處と逃げ廻つて居りながら、屢々隣接國民の死命に關するやうな無謀な舉動をして、其結果いつも自己の事業を滅茶苦茶にしてゐる國民を見るのであるから、事々物々多くは不可解で、此國民の過去の業績から、別に是

といつて教訓となるべき材料は得られないものである。

併し此う極端に相異つた過去を持つてる國民が、近く二三百年以來、地理的に相接して存在することとなつた爲めに、此方は小心翼々、最も困難と思はれた國內各部の融合をすら、爲し遂げてしまひ尙ほ一步踏み出して、歴史的の宿題となつてゐる隣接地方の居住民を扶翼することにまで手を着ける機會を作つたのであるが、彼方は此地理的接壤が原因となつて、過去數世紀の苦辛に成つた事業に蹉跌を來し先輩がやつと築き上げた國際的地位にも、著るしき變化を來たすまでになつた。此ういふ點から觀ると、我々は此國に對して、測り知られざる問題を持つことになつたのであつて、之を解決する準備として、あらゆる方面から此國民を研究し、相當の用意をして置かねばならぬ、否之を怠つたならば、此島に住んでゐる人間ばかりではない、吾々と系統を同じうする文化を持つて居る國民は、必ず遠きか近きかはあるが、將來に非常な困難に陥り、どうかすれば過去の事業を破壊し去るのみでなく、永遠に生存の機會をも失ふに至るかも知れない。

又立場を易へて此ういふ實際的の方面でない、純學術の上から云つたとすると、あゝ云ふ際涯なき平原で、緯度の高い處に住んでゐる人間の作つてゐる社會は、他の國士には到底見ることの出來ない、色々な現象や事實があつて、是が學術上に貴重なる資料となるのであり、此資料の研究は、社會學政治學史學經濟學等に於て、是非一度はやつて見なければならぬものと考へる。其他ロシヤで出來た文學なり

藝術なりには他處では見られない特徴がある爲めに、早くから斯道先輩の注意を惹いてゐたことは、茲で述べる必要もないと考へる。

史學に於ても亦此國の特彩ある過去を研究し記述するに當つて、他のヨーロッパ諸國の學者の爲す所と其趣きを異にし、當代學術のすべてに行渡つた頭で科學的に「何等世界に誇るべきものを持たぬロシヤの過去」を研究し、之を國史として大學に講述するに當つては、教育者の立場として後進の學生に、過去のロシヤは何を爲し遂げ、將來何を爲すべきであるか、將來市民の先頭に立つて活動すべき使命を持つてるものは、いかに行動せざるべからざるかを教へ、學究たる其職に甘んじつゝ嚴正に過去を品騒し、先人の行動を列叙するに當つては、帝王といへども假す所なく、宗教家の怠慢を罵り、西方よりする外人殊にドイツ人の非行を指弾し、遊牧民に苦るしめられたる、東スラブ民族の過去の宿運を悲しみ、廷臣の專恣を責めてロシヤ社會の弊竇を抉剔し、自制なき強者の濫行を叙して、中興の業の爲るべくして成らざりし所以を擧げ青年を呵して改新の業に赴かしめ、ヨーロッパ文明國民の一部としてのロシヤ國民の使命の何れに在るかを教へるまでになつた。此はモスクワ大學教授ワシリイ・オシポヴィチ・クリュチエフスキ(一八三九—一九一一)氏の五〇年の努力の結果である。

此人はソロビヨフ教授の薰陶を受けて大學教授となり、國史の研究と學生の教育とに没頭し、天才的な觀察と獨創的な描出方法とに由りて、國初よりニコライ一世殂落までの歴史を書き、生前に其四卷を

刊行して一七六三年六月の革命までを叙述し、其後を第五卷として發行する豫定であつたが、大戰爭の爲めに其儘になつてしまつて居つた。處が新政府になると一九一九年此書物を完全にして發行する積りと見えて、第五卷を發行したが、此時には教授最近の稿本に據らずして、三〇年前にやられた講義に由つて、カザリンニ世時代パウロ一世時代並びにアレクサンドル一世時代とニコライ一世帝の概説を掲げ、なほ末尾に教授が學生に與へて置かれた、最近發行の講義案の中から、ペトトル大帝殂落以後の大觀とでも云ふべきものを附け加へて、此で教授のロシヤ史を終つたことにして、新政府の教育省で此書物を公刊し、一九一八年より五ヶ年間、新政府が發行權を持ち、五萬部を頒行したといふ文句が一九二一年版の第五卷に印刷されてゐる。

此第五卷は前の四卷とは全然叙述の方法が異つてゐて、革命政府からは至極重寶なものかも知れないが、學術的に云へば前の部分とは餘程價値の下がつたものであると思はれるが、其序文の中に

教授の歴史はウイッテが一九〇一年に抄略させ、二〇部だけ立派な體裁で印刷して、皇帝を始め皇族其他の人々に配附したのであつたが、一九〇七年革命黨の人々が、何處からか此書物を手に入れて来て、教授には無斷で四冊に分けて印刷し、表題を「ロシヤ史」といひ、著者の名は明さずに世に公けにし、革命の已むべからざるを宣傳し、傍ら此書物の賣上高を實際運動の資本とした云々といふ記事がある。

此書物は全體で九四講義より成り、(その中始めの方七四講が首尾一貫してゐる) 頁數二千を超えてゐ

るが各講義一つ一つで、充分に成る時代又は一事項の概念を得られるやうになつて居り、此講義の或部分を節略しやうとすると錦の模様の中からたて糸かよこ糸かを何本か抜き取るやうになつて全體の綾が失くなつてしまひ、おまけに行文が流麗で言句皆偉大な力を持つて一行も無駄な處が無いのであるから、著者其人であるならば省略も出来やうが、他人には手の附けやうの無いものである、といつて決してむづかしい氣のつまるやうなものでなく、読み出すと止められなくなるものであることは、最近に發行されたドイツ譯を見られると直ぐに了解されると考へる。

此書物には英譯とドイツ譯とがあるが、英譯は Hogarth 氏の手に成つてロシャ史といひ、原書が發行されると間もなく刊行されてゐるが、此譯は最初の三卷で終つてゐるやうであり、しかも其第一巻の初め八〇頁ほどは、全部省略されて居り、其後の部分も理由は解らぬが、處々省かれてゐる、譯は中々忠實にやつてあるが、譯者はアレクサンドロフ露英字典（此は極めて敬重すべきものである）一冊を便りにしてゐられたと見えて、同字書に無い文字は省略されたり、又は途方もない譯がついてゐるやうに記憶する。

次にドイツ譯は全部忠實にやつてあつて、教授の史學國史に對する見識、社會の實際と思想とに對する著者の見解の條などは一言一句も違はずに反譯されてゐるから、國史を取扱はるゝ諸君には是非御一讀を願ひ度い、此方は第四巻の終りまでを譯出し、書名を *Geschichte Russlands* といひ、Friedrich Br-

aun und Reinhold von Walter の手で Deutsche Verlagsanstalt より發行されてゐる。

自分は晚學のロシヤ語の智識でトボトボと此書物を讀んでゐる中、特に吾人に取つて面白く又注意すべきであると考へた處を一二ヶ處摘出して諸君の御叱正を願ふことにした。本來ならば何か原文の反譯でなくまとまつた論文體のものを書くのが、本誌に對する禮義なのであるか、俗事に逐はれてゐる自分としては管見を述べて時流を逐はんより、大著述の中から、或點を抜き出して、彼の國の學者はどういふ書き振をしてゐるか、彼國の識者にはどういふ書物が讀まれて居り、どう考へるべく教育されて來たかをお傳へすることが、自分の力相當で又責任であると考へる。

其處で最初に、ロシヤの中堅である大ロシヤ人なるものを、教授は何う見てゐかを擧げよう。

大ロシヤ人の心理、

大ロシヤの自然が特色のあるものであるから、之が反映となつて出來た、民間の季節觀が又大ロシヤ人特有なものである。自然は屢々最も綿密な大ロシヤ人の打算をば嘲けるのである。氣候及び土地の特色は、大ロシヤ人の最も内輪の期待も外れさせることがある。して此欺瞞に慣れたので、打算に鋭どき大ロシヤ人は、時々無我夢中で自然が我儘をやることと、自己の勇氣の我儘な處とを對照させて、何れの點から見ても、最も成算の少ない無計算な決斷をすることを好む。此傾向が無理な幸福を望み成功を賜し、又大ロシヤ人のアウォーシ(やつて見る)となるのである。

大ロシヤ人は誰も彼も同様に日の射してゐる、夏の働く日を大切にせねばならぬこと、農事に活動する爲め、天然が大ロシヤ人に、好都合の日を僅かに與へてゐること、又短かき大ロシヤの夏は、不時に突然に起つて來る霖雨の爲めに、更に短かくされるものであることを知つてゐる。此等の事が、大ロシヤの農民を、取り急ぎ、一所懸命に働き、短かき間に澤山の仕事をやり、適當な時間中に穀物を取り入れること、して其後に秋と冬とは、何の仕事もなくして居るやうにさせた。即ち大ロシヤ人は自分の力を短時間に極端に緊張させるやうに教育され、短かい間に火の出るやうに有效に働き、して其後には秋期及び冬期の已むを得ざる無聊の續く間休息することに慣れれた。ヨーロッパの何れの國民も、短時間に大ロシヤ人が發揮する、あれほどの労力を緊張させることは出來ない、然し凡そヨーロッパの何處でも大ロシヤで行はれてゐるやうな、平均し調節され又區分された、不斷の勞働に不慣れであること、見付からぬだらうと想はれる。他の方面から云へば、地方の特色に由つて、大ロシヤ人の移住の手續きが定まつてゐる。も互に離れて、交通の不便な爲めに、孤立してゐる村落での生活は、ものづから大ロシヤ人に、大きなる聯合、仲のよき團體となつて、行動することを教へ込めなかつた。大ロシヤ人は打ち開けた平原で大勢の見てゐる處で、南方ルスの國の住民と同様には行動しなかつた。此者は森林の深い處で、單獨で手に斧を持つて、天然と争つた。此働きは、沈黙したる、苦るしい、外界の自然に對し、森林に對し、或は荒涼たる原野に對する勞働で、自己及び社會に對する仕事でも、又は自己の感情、

又は人々との關係に對する働きでもなかつた。其故に大ロシヤ人は、誰も見てゐない時には、單獨で他の場合よりもよく働いた、して多人數の力を以てする協同の行動には、非常に苦心して、身を慣らせてゐる。大ロシヤ人は大抵城郭を設けて注意深い、臆病といつてよき、常に自分の事を考へてゐる、非社會的な、世間に出来るよりも、單獨で居る方が良い、まだ自分にも仕事の成功の自信の無い、事業の始めの方によくて、既に或る仕事が爲し遂げられ、或る價値を持ちかけた終の方にわるく、自分に自信の無いことが、大ロシヤ人の力を鼓舞し、成功が其力を失墜させる。大ロシヤ人には謀略と智能とで成功を收めるよりも、障害危險失策に打ち勝つて行く方が仕易く、苦心慘澹、偉らいことを自分のものにするよりも、偉らしい事を仕出す方が容易いのである。大ロシヤ人は智慧のあることを自分で認めた爲めに、馬鹿になる可能性を持つ人間のタイプに屬してゐる。一言にして言へば、大ロシヤ人一人の方が、大ロシヤ人の社會よりも良いのである。

勿論何れの國民も、自然の與へる仕付けに由つて、周圍の世界並びに經由して來た因縁に適合するやうに置かれて居り、其性格の中に、全體ではなく、唯或部分の印象を受け入れるものであり、して此處から種々な様式の民族的の配合又は性格が現はれるることは、一樣でない光線の吸收が、多様の色彩を起すが如きものである。之と同様に國民も四圍のもの又は一定の角度の下で經驗せられたものを觀察し、此のものの彼のものを、一定の屈折を以て其自覺の上に反射させる。土地の自然は、此屈折の度合及び角度

と必然關係を持たぬことはない。豫め計算すること豫め行動の方法を想定の出来ないこと、及び目指した目的に一直線に進むことは、大ロシャ人の思考力の組立ての上に、又考量する方法の上に著るしく現はれてゐる。生活の均等でないことと境遇とは大ロシャ人に経過し來つた道程を判断することを、今後のものを想像して見るよりも、後方を振り返ることを、前程を窺ひ見るよりも餘分にさせた。突然に起る雪風融雪と豫察の出來ぬ八月の激しき寒氣、正月の霧に對する争ひで、大ロシャ人は、物事を豫察する方よりも觀察する方になり、目的を想像するよりも、結果の方を多く注意するやうに覺え込み、總勘定を作成する上で、自分で合計を作る熟練を養つた此熟練は吾人の呼んで、「後との智慧」と稱するものである。諺に「ロシャ人は後との祭に強くなる」といふが、此は全く大ロシャ人の事を云つたものである。然し後との智慧といふのは、後とからよく考へて見るといふのとは同じではない。行路の平坦でないこと、生活に僥倖の多いことの間に、動搖したり、色々と策略を弄する習慣で、大ロシャ人は屢々さっぱりしない、正直でないといふ感を起させる。大ロシャ人は度々物事を二た筋に考へてゐることがある。して此事事が、二た心を持つてゐるやうに見えさせる。大ロシャ人はいつも直接の目的に向つて進む、屢々考量が不充分であつても、脇を見返りながら、其で進んで行く、此の爲めに彼の行動は、謙讓なやうにせた躊躇してゐるやうに見える。其でも大ロシャ人の諺に「額で壁を突き破るな」「真一文字に飛ぶのは鳥だけだ」といふのがある。天然と境遇とが、眞直ぐな道路の上で、曲つた足跡をつけて歩めと大ロ

シヤ人に教へたやうにさせた。大ロシヤ人は行歩するやうに考慮し行動する。大ロシヤの小路を、もつと屈曲させ、一層うねらせて思ひ付くことが出来るかと考へられる。丁度蛇がのたくつたやうである。然し真直ぐに行かうとして見玉へ、唯其屈曲した足跡の上をさまよつて、復元の處に出て來るのである。

大ロシヤの自然界が大ロシヤ人の經濟上の狀態及び種族の性質に及ぼした影響は、斯くの如くである。(第一卷三八八——三九一)

此ういふ性質を持つた種族が、ウオルガリオカの河間地に廣がつて、個々獨立の家、孤立したる村落から發展して、地理上、經濟上又人種の分布の上の結節點であるモスクワの周圍に結びつけられ、其處の君公の宮廷に集まつて來た各地方の公族、西方歐洲並びにポーランド、リトワニヤ邊からの歸化人、蒙古タル等の移住者などが、各方面に活動して、國土の發展と内部の充實とを圖つたのであつた。此手續きをやつてゐた中に、モスクワの君侯がどれほどの仕事をし、何ういふ地位を國史の上で占めてゐるのであるかを教授は次の如く云うてゐられる。

モスクワ諸公の個性、

モスクワ公國興隆の手續き中、其君侯の個人的性質に、重大な意義を持たせる人々が數多くある。モスクワの政治的發展の概説を終るに當つて、吾人は其歴史の中に、此人々の個性の價值をも評定することが出来る。此個性の價値を誇大視すること、モスクワ公國の政治的及び國民的の實力を、其君侯のみ

の事業だし、彼等の創造力彼等の才能の創造だとするのは無用なことである。一四世紀及び一五世紀の史料は、此等君侯の各自の性質を、生き生きと描き出せるやうにはしない。此等の資料で見るとモスクワの太公は、可なり貧弱な型の人々で、太公位の上にイワン、セミヨン、他のイワン、ドミトリ、ワシリイまたワシリイなる名で、相續的に替り合つてゐる人となつて現はれてゐる。此人々の一人一人を觀察すると、特殊な人格をそなへてたものが、吾人の眼の前を通り過ぎて行かず、全く同様な同じ家の像が現はれてゐることに、すぐ氣付かれる。イワン三世までのモスクワ公等は、いづれも瓜二つといつたやうに相似てゐて、觀察者は、此中で誰がイワンで誰がワシリイであるかを定めるのに苦しむのである。彼等の行動の中には、或る個人的の特性は現はれてゐる、然し此特性は君侯の年輩、或は彼等の或者が遭會した、特別な外界の境遇にて説明される。此等の特徴は、全く同一な人間の行動が、此ういふ境遇の爲めに變化しただけで、其以外に出でてゐない。モスクワの諸公が相續的に更代した後とを踵けて行くと、唯彼等の代表的な同族の個性の様子を捉へ得られるのみである。君侯等は觀察者の前には、生命のある人間としても、肖像としてすらも現はれて來ず、木像と云つた方が適當である、觀察者は各人を見て、其姿勢其衣裳を觀察する、然し彼等の面相は觀察者に多くのものを語らない。

モスクワのダニロ・ヴィチの一家には、最もきちんと定まつて、中庸の性質がよく現はれてゐる——中通りの標準よりも高くもなく又低くもない。フェオロード・ボリシオイ・グネズドの一族は、まあアレクサ

ンドル＝ネウスキの一族を除いては、おしなべて優秀な智能の豊富な點では光彩を放つてはゐない。此一族の中で、モスクワのダニロヴィチの一家は、其個人的の性格では、第一線には出て來ない。モスクワ公はすべて光彩の無い、英雄のやうな處も、又精神上にえらい特徴をも持たぬものであつた。第一此君公等は極めて平和な人々であつた、彼等は嫌々ながら戰場に立つた、して戰陣に臨んで度々戰争をしくじつた、彼等は最初櫛の木で作つてあつて、後ドミトリ＝ドンスコイ時代以後には、石で築いたモスクワのクレムルの壁の後ろにかじんで難を逃れた。然し外敵襲來の場合には、彼等はペレヤスラフル、或は其よりももつと遠い何處か、ウォルガ地方かへ立ち退いて軍隊を集め、モスクワは本山貫主等の高僧、君侯の妻女及び子供に、好んで防禦の事を任せた。此君侯等は偉らしい才能にても、又立派なる性質にても、輝やいてはゐないが、又えらい不徳と怖ろしいことでも、特彩を放つてはゐない。此が君侯等を種種な點で中庸を得てゐること、着實なことの模範とならせた、食事の際に、餘分に酒を飲まうとする彼等の傾向は、ウラヂミル＝スピヤトイの口から云ひ現はされてゐる、舊るキルスの人々の世にありふれた激げしさまでには、達しなかつた。此ういふのは、歴史上の人間といふよりも、年代記の型といつた方の、古ロシャの中庸の人間である。彼等一家の特性が最もよく現はれてゐるのは、後世に出來た年次記集中の一書が、セミヨン＝ゴルヅイ公の性質を擧げてゐる記事であらう、其記事に「セミヨン太公は、不正なこと、騒動を起すことを好まず、すべての罪あるものは、自身で處刑したので、ゴルヅイといは

れたが、蜜とブドウ酒とを飲みはしたが、然し酔ふまでは飲まなかつた、して酔つた者を見てゐられなかつた、戦争は好きではなかつたが、軍隊は戦争の準備をさせて持つてゐた」とある。六代の間で、ドミニコ・ドンスコイ一人が、其先輩及び後繼者の、キッチンと列べられた列から、遠く前方に突き出してゐた。トリニティ・ドンスコイ一人が、其先輩及び後繼者の、キッチンと列べられた列から、遠く前方に突き出してゐた。年の若かつた事（三九歳で殂くなつた）、特異の境遇に居つた事、彼を一一歳から武装した駒の上に置いた事、トウェル、リトワニヤ、リヤザン及びオルダとの四方面の戦争、騒動並びに恐怖に充ちた彼の三〇年の治世、とりわけドン河邊での偉大な勝利は、彼の事業とアレクサンドル・ネウスキの事業とを対照させ、年次記は著るしく興奮した氣込で「彼は意志の固き、勇氣のある人で、又鋭とき眼力を持つてた」と彼の事を云つてゐる。同時代の傳記作者はドミトリの平和な信神な、家庭の情の篤い、他の性質を傳へて「彼は書物は讀めなかつたが、然し彼の心の中には經典を携へてゐた」と云つてゐる。此唯た一つの除外例の外は、第一流の畫家にとつてモスクワの普通の諸公は、御用が少ないのである。此等の諸公は、特殊な善き性質で光輝を放つてゐないから、尊重すべき處は少ないが、收入を作る性質は餘分に備へて居り、普通天稟のものゝ少なき人々に、賦與されてゐる性質の、豊富なことで優れてゐた。彼等は確實に父の遺言を守り、「一人だけの事を考へて世を送つた」。六代の間即ちダニイルの殂落からワシリイ・ドミニコ・ドンスコイの殂落まで、モスクワ公國は北方ルスの諸國中で、同族の君侯の争亂の事で焦慮しない唯一の國となつてゐたとも云つて良い。何となればモスクワの君侯等は、極めて謹嚴な公子等で、

彼等は其父の記憶と遺訓とを、神聖なものとして遵奉してゐたからである。之に由つて、遺傳に由る觀念の集まり、統治の習慣と方法とが、早くから彼等の間に成り立ち、父又は祖父の歴史の一家の慣はしが出來、此慣はしが、彼等にとつて、個人の見識の代理となつた事は、恰も博ろき學問が、屢々吾人に思想を備へることの代理をする通りである。モスクワの諸君主に、行動の確乎たる處動作の平均してゐること、活動の終始一貫してゐることは、此處より起る。彼等は個人の考へ附きに基づいてよりも、舊るき記憶、父の定めて置いた遺言に據つて行動した方が多かつた、之に由つて成功の見込の立たぬ斷絶なく、絶えず成功を收めて、定まつた目的に向いて行動した、恰も確固なる記憶が、智慧の乏しい弟子に、自分の言語で話すことに慣れてる。才氣煥發の子供よりも、課題にしつかりと答へることが出来るやうにするが如きである。モスクワ公の手許では、仕事が平均して又中絶してゐない縫ひ糸で行はれた、丁度紡き糸が、紡錘の運動に相當して、婦人の手の中で行はれると同様である。子供は固く父の行動の後とを捉へて居り、自分の力相當に之を前方に進める。父の遺言を其冷たき遺言の言葉の儘で尊重してゐるのが、或る時には緩かなる敬虔な情の程度まで燃え上る。セミヨン・ゴルヅイは、其諸弟に宛てた遺言の終りに「自分はも前に此文句を書き遣し、此うして吾々の親の記憶が無くならず、又吾々の燈火が消え失せないことを望む」と書いた。

此同族の傳統此モスクワ諸公相傳の政策は何より成立したのであるか。彼等は些細な事件によく事務

を處理する始末屋で、少し宛事業をする人である。彼等の中の最初の、道徳の方から云ふと、醜くき爭ひで成功を收めた人は「カリタ」即ち「財布」といふ名で子孫の記憶に傳はつてゐるのは尤もなことである。最高の裁判官たる帝位の前に現はれる準備をし、遺言狀を書記に筆記させて、此等の君侯等は國家の經濟の細目に如何程注意をしてゐたか、經濟のあらゆる細部を、如何程よく記憶してゐたか。毛裏の外套も家畜も、黃金の帶も、寶物入れの小匣も、残らず書き上げ、あらゆる物に相續人が定まつてゐる。父の獲たものを保存し、之に或る新たなるものをつけ加へること、新たな毛裏の外套、新たな村落をつけ足すこと——彼等が其遺言狀に云ひ現はしてゐる處では、明らかに彼等の政治的考量が、之に向けられて居つた。此特色が又彼等の政治的成功の援助となつた。

各時代には其時代に相當した各英雄がある、然し一三、四世紀はルスの國で一般の墮落時代で、局量の偏狹な見識の小規模な、こせついたつまらぬ人間の時代である。國內及び國外の不幸の爲め、人間は臆病な理想の低いものになり、無精なものとなり、高遠な思想及び努力を棄てた。一三、四世紀の年次記をルスの國土此國土を異教徒より防護する必要、南方ルスの君侯及び一一、二世紀の年次記者の言語と同じ意味を表示するそんな事項にふれた前前代の人々の言葉は見えない。人々は自己の個人的利益の範圍に閉ぢ込められ、他人の利益をば利用するためばかりに、自分の範圍から出て行つた。社會には公衆の利益といふことが衰るへ、其指導者の思慮が、寶石で作つた箱の中に閉ぢ込められるときは、いつ

も、何事は措いても最も強く個人の利益の爲めに行動する人間が、萬事を支配し、して此ういふ人間はきまつて最も天稟の優れたものではなく、最も他人を迫害するもので、此一般の利益の墮落が、最も他人を威嚇する人々を優勢ならしむる。モスクワの諸公は、丁度此ういふ地位に立つてゐた、其系圖上の地位から云へば此君公は最も權利の弱き、最も地位の低くき君公ではあるが、彼等の經濟と地位の事情が、彼等に自己の利益を標榜して行動する、大きな物質を與へた。他の人々よりも彼等は、其時代の性質及び事情に融合がよく出來たのであり、個人の利益の爲めに、他の人々よりも果斷に行動を起した。

彼等の行動には、丁度商工業家の間で行はれてゐるそれの趣があつた、此ういふ人々には、利益の獲得といふことが、ひどく勇氣を起させ、他人の懷具合を打算することが、最も優れた性質で又努力である。

商人は他人の利益を忘れて、自己の商業事務に従事すればするほど、自分を成功に導びいて行く。自分はモスクワ諸公の一家の性質が、彼等の成功の根本事情中には働いてゐないで、性質其物が、此事情の生産物であつた事を云はうと思ふ、彼等一家の特性は、モスクワの國民的、政治的の實力を創造せず、却つて其自身が、此の實力を作り出した、歴史的の力及び、事情であり、モスクワ公國の偉らくなつた爲めに起つた、さういふ第二段のもので、其一例をいへば、此う云ふものは、モスクワの位置の好適である爲めに、此都會に誘ひ寄せられ、密集したモスクワ人の共同動作であつた——難局に當つて一度ならず、其君公を救ひ出したボヤル階級である。人生の事情は偉大な人は、アンドレイ・ボゴリュボフスキ公

の如く細瑣な事件を處理するやうに置かれてゐて、小さな器局の人々が、モスクワ諸公の如く、大きな事務を片附けて行くやうになつてゐる如く、そんなに思ふ儘にならぬやうに出來てゐる。(第二卷六〇)

六五頁)

モスクワの諸公の行績を、教授は此う評定してゐられるが、吾人目下の状態では成る程左様ですかといつてゐるより仕方がない。若し此が教授の所謂科學的研究から出た忠實なる批判であるとするならば隨分低級な君侯であつたといふべきで、字の書けない人が君公である(日本の南北朝時代に)などといふことは、吾人の考へられない處である。然しモスクワの君公のみではない、ペートル大帝は字が満足に書けなかつた人だと、教授は筆蹟を示して指示されてゐるのであるから、三百年も前に書を解しない人が帝位を履んでゐても不思議はあるまい。

次にモスクワ公國の大事業であつたアシャ遊牧民掃蕩の條を叙する處に、次のやうな記事がある。血の廻りが悪るく、東洋の事情を識別する能力の乏しい人々が此ういふものを見ていかなる感想を懷くであらうか。

東南との戦争、

之に反してアシャの方面では、國力を消耗させる間斷なき戦争が行はれて。此時代此方面には、和睦も平和な時も、規則正しさ戦争もなく、双方からの絶えざる襲撃が行はれた。曩古に掲げたフレッチャー

は、モスクワでは毎年クリムのタタル、ノガイ人、其他東方の異人種との戦争があつた事を傳へてゐる。ゾロタヤリオルダ（金黨國）は一五世紀に既に衰弱して、一六世紀の初年に全く破滅した。其廢墟から新たなタタルの巣窟、カザンとアストラハンとのツアルの國、クリムリハーン國及びノガイの諸オルダがウオルガ河外の土地及びアゾフ海黒海の沿岸クバンとドニエブルの間に出来た。カザンとアストラハンとの征服の後、クリムがトルコ人との關係で、モスクワに最大な不安を起させた。トルコ人は一四七五年にクリムを征服し、カファリフェオドシャ、スダクリスロジ其他クリム海岸の殖民諸市を領してゐたゼノア人の優勢なことに、止めを刺した。廣大な空漠たるステップにて包まれ、大陸とはペレコフ（地頸）狭き頸の處を断ち切つてゐる六露里の長さの幅の廣ろき深濠、之に防禦を施した高い城壁が附いてゐるもので絶縁し、クリム半島は大陸からの劫掠者には、手の附けやうのない住み家となつてゐた。一六世紀の中葉に、タタル人、リトワニヤ人及びモスクワ人の事を書いたリトワニヤ人ミハロンは、クリムに三、〇〇〇〇人以上の騎馬武者の居ないことを書いてゐる、然しウラル山からドナウ下流までの間の、黒海沿岸裏海沿岸の草原で遊牧してゐる無數のタタルの幕營が、クリムのトルコ人と聯合する準備を整へてゐた。一五七一年及び一五七二年にクリム汗が二度一二万許りの大集團を連れて、モスクワを攻撃した。クリム汗國はボーランド、リトワニヤ、及びモスクワを襲撃するに適した劫掠者の、鉅大なる團體を成した。此襲撃が、彼等に生命を與へる主なる營業であつた。フレッチャーの云ふ所では、クリムのタタル

は通例モスクワの君主の邊境に一年に一、二回宛、時にはツロイツィンの日（五旬節の祭イエス更生祭より第八次の日曜日）頃に、又屢々收穫期即ち畠に散らばつてゐる人間を容易に捕へられる時に襲來する。併し冬期の襲撃も珍らしいことではない、此季節には、極寒が河及び沼を超えての往來をし易する。

一六世紀の初期にモスクワの國とクリムとの間に在る南方のステップは、オカ河岸のスタラヤリリヤザン、ドン河の支流なるブイストラヤソスナ河岸のエレツの對岸から始まつた。タタル人は半弓、彎曲した長刀並びに短刀、稀には槍位の武器を携へて、丈の低くき然し逞ましき、負載力のあるステップの馬に跨り、輜重は持たず乾した粟飯、又は牝馬の乳から作った乾酪の、豊富ならざる蓄へを口にして、容易に此通過の出來ないステップを、荒漠なる何千露里かの道路を走り通しにして横ぎつた。彼等は度度襲撃してゐるので、よく此ステップを記憶し、其特徴に適應し、最も好都合である道路サクマ（轍）又はシリヤフ（歩道）を發見し、最も優れたるステップでの襲撃戦法を作り上げた、彼等は河の渡りを避け、分水界に沿うて路を搜めた、彼等のモスクワへの通路の中で主要なるものは、ムラフスキ街道で、ペレコフからツラまでの間、ドニエブルと西ドネツ河の兩盆地の河流の分水地の間を通つてゐるものである。タタル人はモスクワの斥候の眼に自分等の行動が觸れぬやうにして大きな瞬間、またはオフラグ（土地の裂け目）をつたつて潜行し、夜間は火を點けないで、物慣れた支隊を、すべての方向に出した。

此うして彼等は敵に氣取られないで、ロシヤの國境に接近するを得、怖ろしき劫掠をすることが出來る。

人民ある地方に百露里ほども、密集した部隊となつて侵入して、其から後方に退却し、主力隊から左右に長い枝隊を出し、途中に在るすべての物を掃ひ集め、行動の中には殺戮と焚き拂ひとを行つて、人間家畜、價値のあるものは何品を問はず、持ち運びの出來るのは、何でも取つて行く、此は通例年々の襲撃で、此時タルは、突然ルスの國に飛びかゝつて來、數百人或は千人位の獨立の團體となつて、フレッチャーの言葉を假りて云ふと、國境の邊を雁の群れのやうに飛び廻つて、獲物の見えた處に、とびついて來る。捕虜此が主なる獲得物で、常に彼等が搜し廻つてゐるものであり、殊に娘の児と子供とに目をつけてゐる。彼等は捕虜を縛する爲めに、革で作つた紐を携帶し、又捕へた子供を入れる用意に、大きな籠をすら持つてゐた。捕虜はトルコ又は他の國で賣り拂つた。カファは主なる奴隸市場で、ポーランド、リトワニヤ、モスクヴィヤから連れて來られた男女の捕虜數万は、いつも此處で見かけられた。此處で彼等を船に積み入れ、コンスタンチノブル、アナトリヤ(小アシャ)及び他のヨーロッパ、アシャ、アフリカの各地に送り出した。一六世紀には、黒海及び地中海沿岸の都市で、主人の子供を、ポーランド又はロシヤの子守歌で寝かしつけてゐる下婢(女奴隸)に出會はすのは、稀なことではなかつた。全クリム地方では捕虜以外に、他の召使は無かつた。モスクワから出た奴隸は、逃亡が上手である爲めに、クリムの市場では、ポーランド、リトワニヤ出のものよりも價が低かつた。生きた商品を市場で二列に

列べ、數十人の頸に鎖をつけて、賣り主は大きな聲で、此奴隸は最も健康な、素直な、性質の悪くない、たつた今モスコウイヤからではなく、王國ボーランドから連れて來たものであると怒鳴つてた。或る金貸のユダヤ人が、クリムに通ずるペレコブの唯た一つの門の處に坐つてゐて、ボーランド、リトワニヤ及びモスコウイヤより此處に這入つて來る果てしの無き、捕虜の通過を目撃して、あれ等の國には、まだ人が居るのか、其とももう誰も殘つてゐないのかと、ミハロンに尋ねたといふことが、ミハロンの言葉に見えてゐる位、多數の捕虜が、クリムに這入つた。(第二卷二六八——二七一)

いかに血の氣の少ない人でも、此う感傷的な事實を列べられては、何とか發憤せねばならぬと思はれるが、此が決して空想でも臆斷でもなく、ロシャの記錄や史料から取つた處は出典を示して無いが、イギリス人やリトワニヤ人の記事には、一々其出處を示して、讀者の印象を深くしてゐる邊の用意は、盡きざる意味を包んでゐるものといつても宜いではないか、此絶えざる國難、掃ひ難き厄介物との交渉が、ロシャ中世の社會、經濟組織の基調となり、やがては政治上の問題となつて識者の解決をまち、國民の奮起を促したのであり、ロシャの屯田制の完整コサツ組織の發達及び火器使用の戰法などが、遂に此事業を解決させたのであつたが、教授は此記事をあらゆる方面から試みた後、第二卷の最後の頁に次のやうに云つてゐる。

ヨーロッパに於てのモスクワの地位

クリュチエフスキ教授の著書から(堀)

此よりモスクワ帝國が、他のヨーロッパ諸國民の間で、如何なる地位を占めてたかを觀察しよう。當時のヨーロッパは此國家の存在其物をやつと認めてゐたのだから、此問題には答へられないであらう。然し答へられないといつたとて、ヨシヤかヨーロッパにとつて有用であつたことには變化を起させはしない。各國民には、其々宿運と使命とがある。國民の宿運といふのは、國民が其中で生存し、行動するに定まつてた、外界の事情の綜合より成立する。國民の使命は國民が此等の事情から作り出し、自己の生存及び活動の爲めに、此等の事情を行使した其行爲に由つて表示される。吾が國民は宿運に因つて、ヨーロッパの東の門の處に此處へ押込んで來るアシャの牧畜をやつてゐる剽掠者の防禦に當るやうに置かれた。此國民は此アシャ人の襲撃を扼止して、何世紀も自分の力を費ひ盡した、自分ならびにアシャ民族の骨で、廣大なドン、ウォルガの草原地を肥沃にして、其民族の或者をうち倒し、他の民族はキリスト教會の門を通らせて、ヨーロッパの社會中に導びき入れた。此間に西ヨーロッパはマホメット教徒の襲撃を免かれ、海洋を踰えて新大陸に向ひ、其處で自己の勞力及び勢力の爲めに、其手の附いてない自然の富を開拓して、廣大な又幸福な活動場を發見した。此ヨーロッパは殖民地の富源、肉桂や丁子の方に、西方に顔を向けて、遠方から、ウラル・アルタイの東方から、何者も脅迫を加へてるものは無いと感じた、して彼處では激げしい鬭争が行はれた事、ドニエプル河及びクリヤジマ河の主なる戰爭の前衛地を變更して、此戰鬪の本陣がモスクワ河の岸に移り、此處で一六世紀に國家の中心が成り立ち、此國が防禦

の地位から、アシヤの巣窟への攻撃に轉じ、ヨーロッパの文化をタタルが襲撃するのを救つた事を、よく了解してゐない。此うやつて吾人はヨーロッパの外藩に現はれ、ヨーロッパ文明の本幹を防禦した。

然し何處でも番人の役目は感謝を受けることは少なく、直ちに忘却されるものである、殊に番人がよく目を届かせるだけ、衛られてゐるものは枕を高くする、して自分の安全の爲めに拂はれた犠牲を益々廉價に評價する傾のあるものである。一六世紀の終り頃、モスクワ帝國のヨーロッパに於ける地位は此ういふものであつた。（第二卷五一五——五一六）

教授は著述をする冒頭に、自分は唯古るいことを知らせる爲めに書物を書いてゐるのではない、將來爲すべき事の基礎となり指針となるべきことを特に國家の中堅となるべき若き人々に傳へるべきであるといつてゐられる、此ういふ心持の人が此ういふ言葉を述べてゐることは、何の爲めであるか、吾人も史學を死學としてやつてゐるのでないから、何と考へて良いのであるか。（昭和二年三月十七日）

堀 竹 雄